

忙しい中にドイツ語の依頼に来て、私がこの学校に来るまでの十数年の間公務の余暇教へて来た、この社会現象を諸君は何と見るか。医学は日進月歩する。諸君は時勢にとりのこされ、人生の落伍者になってもいいか。そんな退嬰的人間では活社会を闊歩する者にはなれぬ、苦勞し給へ。やがてそれが身の為だ。…」

この言葉が身に沁みて味わされる、と筑紫は書いているが、医学にとってドイツ語の知識は不可欠であるとの確信が磯部にはあったのだ。だが、明治時代と異なり昭和になると医学校においてさえドイツ語不要論が一時的にせよ、出るようになっているのだ。

履歴書によると、磯部は昭和21年3月、久留米医科大学教授となり（28年3月まで）、この間財団法人久留米医科大学理事も務めた。昭和25年3月久留米大学が設立、商学部が開設されと同学部教授となり、ドイツ語、ドイツ文学、ラテン語を担当した。昭和28年3月定年退職したが、引き続き嘱託教授（商学部勤務）として留まった。そして昭和31年1月からは医学部医学進学課程勤務に変わった。この間『医学独文の構造』『独逸医文の書き方』『医学単語3000』『医学生のラテン』等の編著を次々と世に送った。

昭和30年4月から35年3月まで九州大学分校（教養部）の非常勤講師を務めた。当時九大教養部の学生だった筆者はドイツ語を教わった。それは昭和35年の2年生の時に、その年の前期の購読の時間にG・ケラーの『七つの伝説』を読んだ。相手が文学部生だったので、得意な医学ドイツ語ではなく、こうした文学作品を教材に選んだのであろう。独特の抑揚のある声で訳読を進めていった師の様子を思い出す。

久留米において終始ドイツ語、特に医学ドイツ語を講義し続けた磯部幸一は、1963年（昭和38）4月23日に世を去った。

九州帝国大学法文学部講師ライントエス

九州帝国大学に法文学部が創設され独文科が置かれたのは1925年（大正14）8月であった。この時に東北帝大にも独文科が置かれたが、これらは国立大学の独文科としては東京、京都両帝大に次ぐものだった。そして初代独文科教授には三高教授兼京都帝大文学部講師の片山正雄が任命された。助教授には1927年（昭和2）佐藤通次が就任した。だが独文科専任の外国人教師はいなかった。今日から見れば奇異に思われるかも知れないが、九大独文科に専任の外国人教師が雇用されたのは昭和30年代になってからである。これは専攻生が少なかったこともあるが、戦前ではドイツ語教育の中心は大学ではなく、旧制高校にあったことが大きい。独語に限っても旧制高校には大抵少なくとも1人は専任の外国人教師がいた。五高では2人いたこともある。そういうわけで初期の九大独文科では旧制福岡高等学校の教師だったハインリヒ・ライントエスが講師嘱託として授業を担当したのである。

さて、筆者の手元には現在九大文学部に保存されているライントエスの履歴書の写しがある。それによると「原籍独逸国ハンデルナッハ」となっており、1885年4月27日に生まれている。ただしこのハンデルナッハという地名はドイツ地名辞典に出ていないところを見ると、アンデ

ルナッハの誤記ではあるまいか。来日前の学歴等については全く記載がなく、1915年にドイツの高等学校教員検定に合格したことが書かれている。そして大正13年10月1日付で福岡高等学校独語科教員として雇い入れられた。同僚に白川精一、秋山六郎兵衛がいた。契約では期間は3年で月給452円であった。翌14年4月に九州帝国大学法文学部の独語講師を依頼された(年報600円)。大正15年3月には法文学部の独語講師嘱託を解かれ、独文学講師を依頼された。これは最初は独文学の専攻生がいないので法文学部の一般独語を担当していたが、その後独文学志望の学生が入学して来たので同科担当の講師になったのであろう。

以後、ライントエスは1932年(昭和7)3月末を以て本務校である福高を契約期限満期で解職するまで九大法文学部独文学講師を務めた。(この間昭和3年5月から10月まで一時帰国した)なお九大では昭和2年以降手当金年1200円を支給され、6年以降は1300円に上がった。履歴書によると、九大の方は昭和7年5月31日付で講師嘱託を解かれた。

ところでライントエスの講義については『九州帝国大学新聞』第72号(昭和7年5月20日発行)掲載の「ライントエス氏任期満了・近く帰国の途に上る」と題する記事によると、独文科では演習を受け持ち、ゲーテ、シラー、ヘッベル、グリルパルツァーなどの古典作家の代表作(主に戯曲)を一つ乃至二つを選んで講義、その間文法、中高ドイツ語、ドイツ韻律学等の講義も試みたという。そして彼の教授振りについては「講義振りには別に異色なく、あの肥満した体から出る声はいたって細く、温厚篤実な型に属する人であった」と評している。さらに「氏の専門が地理学であるためか、休暇にはよく旅行される様子であった」と記している。この記事は最後に、「氏は近く神戸出帆の外国船にて印度洋経由にて独逸へ帰国さるゝ由」と記しているが、帰国後の動静は杳として知れない。九大独文科での教え子には、石本岩根、井狩栄太郎、森永隆、千代正一郎、溝辺龍雄など後年日本の独語・独文学のために活躍した人々がいる。だが、温厚篤実ではあるが、特に講義に異色がなかったためであろうか、ライントエスは彼らにさして強い印象を残さなかったようだ。千代正一郎『ドイツ語教育五十年』(1982)にも、溝辺龍雄「昭和初期の九大独文科」(『ひろの』32号, 1992)にも主任教授だった片山正雄や助教授の佐藤通次についてはかなり詳細に語っているが、ライントエスについては全くといってよいほど何も語っていない。確かに明治時代と異なり、外国人教師は研究教育の中心的役割は担わなくなっており、日本人教師を補助する存在になっていたわけで、それはドイツ文学においても同じだった。だが、草創期の九大独文科にあつて約7年間、地味ではあるが真面目に講義を担当したライントエスの功績に対しては一定の評価がなされてしかるべきであろう。

彼の後任には同じく福岡高等学校の独語教師だったハンス・エックルトが就任した。この人はベルリン大学やハイデルベルク大学に学び、日本語も出来た人で後年日本音楽の研究で有名になった。